



— 猪 考 —

大森山動物園長

小松 守

今年の干支は「亥」、音読みは「がい」、十二支の最後である。十二支には動物を当てているが、それに「猪」（イノシシ）が登場するのは、人と猪のつきあいが長い証でもある。

「猪」は「けものへん」に「者」と書く。「者」の字は藤堂明保氏の漢字の話（朝日選書）によると、「𤝵」すなわち火を集中するという意味の「煮」の元になる字であり、集中していっぱい詰めるという意味をもっている。人間が集中する場所は「都」となり、日がたくさん集まれば「暑く」なる。「猪」の字は「けもの」すなわち、動物がたくさんいることで、言い換えれば肉がたくさん集中し詰まっている様子を表している。「シシ」は獣肉を意味するが、「イノシシ」は、正に肉のかたまりを名にした動物と言える。猪は家畜化され豚となり、人間の豊かな食生活を保障してくれた大事な動物である。

一方、猪は荒々しく勇猛なイメージであり、よく「野武士」にたとえられる。また、猪と聞いて誰もが「猪突猛進」という言葉を思い浮かべる。重量感あふれる堅固な体躯の猪がなりふり構わず一気に突っ込んでくる様子を指す。ところが、猪は必ずしもイメージするような荒くれものでも、無鉄砲な動物でもない。

以前、大森山動物園で猪を飼育していた。飼育場所が狭いため飼育員と猪の間で摩擦が起きそうになることもしばしば。飼育員が猪の領域に踏みこむと、当然、猪は自分を守ろうと攻撃的になるのである。しかし、人との間に一定の距離保とうとする猪の立場を考えた飼育員は、相手との間合いを読み取り、気遣うことで、猪の攻撃を抑えることができたのであった。猛々しく猪突猛進がトレードマークの猪も、接し方によっては穏健な動物になるし、こちら側の心を察し応えてくれる賢い動物でもある。こうした関係は何も猪に限ったことではなく動物一般に通じるものと思う。生き物は本来、無益に争うことはしない。それは自分を大事することの裏返しでもある。また、動物は人といい関係になれば親和的な態度をかえしてくれるものである。

飛躍した展開になるが、トラブルを避けながら相手を尊重し気遣いながら猪を上手に飼育した話は私たちの人づきあい、人間関係に大事なものを教えているような気がする。高度でスピード化したIT情報が溢れる現代社会では、無機的な電子情報でのコミュニケーションに偏りがちとなり、動物が自然に編み出した、目と目を合わせ、向き合い、互いを尊重した心を通わせた会話が少なくなっている気がする。相手を気遣い呼吸を合わせた心のやり取り、果たしてどれだけできているだろうか。例えば「いじめ」が社会問題化しているが、このことは子供同士、相手を思い気遣う心が希薄になっているのではないだろうか。その原因の一つは大人社会で起きている不寛容さにある気がする。子どもは大人を想像以上に観察し、敏感に感じ取り稚拙な手段として「いじめ」行動で模倣しているのかもしれない。

猪年の今年、目標に向かいスピード感をもった猪突猛進もいいが、時には立ち止まり、人づきあいについて一度じっくりと見つめ直すことも必要ではないだろうか。